

『台湾教科用書国民読本』の語彙の特徴

中 田 敏 夫

はじめに

軍神広瀬中佐は『広辞苑』（第5版）によれば次のようにある。

【広瀬武夫】軍人。海軍中佐。豊後竹田生れ。ロシア駐在武官。日露戦争の際、旅順港口閉塞隊を指揮、退船の際、上等兵曹杉野孫七を捜索して引揚げる途中、戦死。軍神として文部省唱歌にも歌われた。(1968-1904)

夏目漱石は「それから」(13章)の中で、広瀬中佐に関して代助に次のような感想を述べさせている。

廣瀬中佐は日露戦争のときに、閉塞隊に加はつて斃れたため、当時の人から偶像視されて、とうとう軍神とまで崇められた。けれども、四五年後の今日に至つて見ると、もう軍神廣瀬中佐の名を口にするものも殆んどなくなつて仕舞つた。英雄の流行廃はこれ程急劇なものである。(『夏目漱石全集 第八巻 1956 岩波書店』183頁)

我々は現在、『広辞苑』にみるような形で、日露戦争後から戦中・戦後にかけて広瀬中佐は日本人の心の中に軍神・英雄として自然に受け止められていたかのような感覚をもつ。ところが漱石の指摘にある通り、軍神と崇められた存在であっても、そのままにしておけば「口にするものも殆どなくな」り、いつしか忘れ去られてしまうものなのである。軍神広瀬中佐を国民一人一人の心の中につなぎ止めるためにはそのための装置が必要であった。そしてその装置の一つとして、国定読本があった。この作品は国定読本第2期にはじめて登場し、第5期まで韻文調になるものの変ることなく採択され、教室で読み継がれたのである。

教材を読み進める中で、子どもはことばの意味を学ぶ。次の「なげきたり」、「うらみ」ということばは広瀬中佐の心情にぴったり寄り添いながら子どもに説明されたことであろう。君のため、国のため、名誉の戦死をとげた軍人が軍神として甦っていくプロセスである。

敵ノ砲台ヨリハ砲丸ヲアビセカクルコトイヨイヨ盛ナリ。(中略) 中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキキタリ。一発ノ砲丸ハタチマチ中佐ノ身ヲ払ヘリ。中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ残シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

(第2期巻7 第二十六広瀬中佐)

船は次第に波間に沈み、敵弾いよいよあたりにしげし。今はとボートに移れる中佐、飛來るたまに忽ち失せて、旅順港外、うらみぞ深き、軍神広瀬と其の名残れど。

(第5期巻8 第十三広瀬中佐)

この広瀬中佐は、台湾国語読本・朝鮮国語読本に2期ずつ登場し、それぞれの地の子どもにも同様のプロセスで広瀬中佐の思いを追体験させ、その文脈上でことばを獲得させていったことであろう。サピア・ウォーフの仮説を敷衍すれば、「我々は教科書を通して世界を眺める」ことになるのである。

筆者はこれまで、教材タイトル、教材内容などの観点から、『台湾教科用書国民読本』（明治33年巻1発行、以下『国民読本』）と内地編纂国語読本の比較を行ってきた。その結果、多くの独自の特徴を持った『国民読本』ではあるが、実科的、総合的な読本のスタイルを取っていることなど内地編纂教科書に通じる面も併せ持つことを指摘してきた（注1）。この独自の側面と内地教科書の延長上の性格を併せ持つことこそが、台湾人に対する統治初期言語教育の本質でもあったと考える（注2）。

本稿では、『国民読本』所載の語彙の特徴を量的観点から分析する。そして語彙を量的観点から見た場合本書が上記の指摘をどのように具現するかを検討したい。具体的には国定読本第1期所謂イエスシ読本（明治37年より使用。以下、『国定1期』）を比較資料とし、品詞構成、高頻度語彙の分布の観点から特徴を概括していきたい（注3）。

1. 『台湾教科用書国民読本』の概要

『国民読本』の詳細は中田（2004）を参照されたい。台湾総督府民政部学務課により、明治33年3月台湾公学校最初の国語教科書となる『台湾公学読本巻一』が発行され、その後、『台湾教科用書国民読本』と改称され、明治36年にかけて全十二巻が出版されている。

教科書編纂上の最大の特徴は、初学年の導入にゴアン式教授法（注4）がとられ、教科書はそれに準じた形で編集されている点である。当時の内地の教科書が庶物教育の精神に基づく単語、単句、単文から出発するのが主流であった時代に、一連の行動を描写したセンテンスから出発している。また課によっては本文に続き「応用」という反復練習的課題を一課の内に入れ、「常ニ土語ト対照シテ其意義ヲ会得セシメ」（注5）るために対訳式「土語読方」を補う課もあり、異色な一課の構成となっている面もある。

2. 品詞構成からみた『台湾教科用書国民読本』の語彙

2.1 一般文章との比較

はじめに『国民読本』の品詞構成をみることにする。表1はその調査結果である。まず樺島（1979）が行った9種の文章の品詞構成（表2）との比較から『国民読本』の特徴を考えてみたい。

なお、国立国語研究所（1985）を参考にデータ処理をした関係上、品詞分類もそこでの基準に従っている。形状詞とは、同書によれば、形容動詞の語幹にあたる部分を「形状詞」として一単位とし、語尾にあたる部分を助動詞としたものである。また、樺島のデータは述ベ語を扱ったものであるため、ここでは述ベ語に限って考察を行っていく。

表1と表2の結果から、『国民読本』の分布に最も近いのは「小説地」であることがわかる。名詞の分布では、国民読本の50.5%（名詞＋代名詞）は樺島の小説地50.2%とほぼ同じ数値である。以下、動詞は小説地32.0%に対し31.9%、形容詞は小説地4.3%に対し4.0%、形状詞は小説地の形容動詞3.0%に対し3.2%、連体詞は小説地2.6%に対し2.9%となっている。その他、副詞は小説地6.5%に対し5.2%、接続詞は小説地1.3%に対し2.0%、感動詞は小説地0.1%に対し0.2%であり、若干の開きはあるものの、大きな差にはなっていない。

【表1 国民読本 品詞構成】

	異なり語	述べ語
名詞	1994 (61.9%)	7943 (47.9%)
代名詞	30 (0.6%)	438 (2.6%)
動詞	817 (25.4%)	5284 (31.9%)
形容詞	103 (3.2%)	664 (4.0%)
形状詞	95 (2.9%)	524 (3.2%)
連体詞	11 (0.3%)	479 (2.9%)
副詞	135 (4.2%)	862 (5.2%)
接続詞	18 (0.6%)	339 (2.0%)
感動詞	19 (0.6%)	36 (0.2%)
計	3222	16569

【表2 樺島 (1979) 掲載 品詞構成】

	名詞	動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	接続詞	感動詞	自立語総数
談話語	43.2	25.1	6.9	3.3	10.1	1.8	2.6	7.0	2300
小説地	50.2	32.0	4.3	3.0	6.5	2.6	1.3	0.1	27874
社説	51.1	30.7	3.8	4.5	5.5	2.8	1.6	0.0	18549
今日の問題	52.5	30.9	4.1	3.4	5.3	2.3	1.5	0.0	6.306
短歌	54.3	32.0	6.8	1.5	2.8	2.4	0.0	0.2	3087
日本文学大辞典	59.6	26.8	2.4	3.9	3.7	2.3	1.3	0.0	6908
俳句	62.7	27.0	5.4	1.2	2.6	1.0	0.0	0.1	2139
新聞記事	68.3	24.6	1.5	1.1	2.1	1.8	0.6	0.0	6075
見出し	74.0	22.6	1.2	1.1	1.0	0.1	0.0	0.0	2494

『国民読本』は、1.『台湾教科用書国民読本』の概要で述べた通り、異色な構成を取る面は確かに認められるが、教材編成及び教材内容を大局的にみればそれまでの内地の国語読本と共通する(注6)。台湾総督府学務課編『台湾公学校教授要旨』(明治33年)「緒論」には次のようにある。

国語ノ基礎已ニ立テル上ハ、読方ハ、内地児童ニ対スルト略ボ同様ナル方法ヲ取ルコトヲ得ベク、読本ノ如キモ、唯其材料ノ選択ヲ異ニスルノミニテ、其体裁は、全く内地ノモノト逕庭ナキニ至リ、(12頁)

この点は、『国民読本』の編纂を、それまで国語伝習所、国語学校第一附属学校などで台湾人への日本語教授に直接携わってきた教員などに任せず、民政部学務課編書事務嘱託として、内地での教科書編纂の経験のある大矢透と杉山文悟を任命していた人事面からもわかる(注7)。教材課名の一覧を比較考察した中田(2003b)によれば、『国民読本』と『国定第1期』の共通課名は巻3以降で26.8%ある。『国民読本』が『国定第1期』より早い成立であったにも関わらずこのような一致率をみる背景として、中田(2003b)では文部省編纂『読書入門』(明治19年)、同『尋常小学読本』(明治20年)の影響を指摘している。

『尋常小学読本』は、井上（1984）によれば、「我が国にも亦読本の総合的編纂が採用され、前期の言語若しくは実科読本を駆逐するに至る」ものであり、「実に読本編纂の基礎を置いたものであり、しかも後世にその模範を垂れ」、「明治二・三十年頃の民間編纂はもとより、国定読本となつても長くその編纂法を遵奉して、殆どその方向を変へなかつた観がある」（注8）といわれる文部省の編纂にかかる教科書である。その「教材の多方面であり、総合的であること、文章も亦比較的多種多様であ」（注9）、四箇年間の系統性が配慮されている点が国語読本としての模範となった大きな理由と考えられる。『国民読本』の編纂者の一人大矢透は、文部省に明治19年「文部省雇 編輯局詰」となり、同24年文部省属非職となっており、文部省編である『尋常小学読本』が明治20年に発行される際には文部省に在職しており（注10）、同書の内容には精通していたものと思われ、その影響を受けた可能性は高い。『国民読本』の品詞別結果が、樺島の9種の文章中、「小説地」に最も近い結果になったことは、『国民読本』の文章が、「教材の多方面であり、総合的であること、文章も亦比較的多種多様であ」る『尋常小学読本』と共通する面があったからであろう。

なお、『国民読本』には会話文も含まれるがその数は少なく、また全体が会話で構成されているものはさらに少ない。樺島の「談話語」とはその点で異なる。「社説・今日の問題」といった説明文も多種多様な文章である『国民読本』からは遠くだろう。「短歌・俳句」といった韻文、「日本文学大辞典・新聞記事・見出し」といった情報伝達に主眼のある文章とは明らかに異なった性格を持っている。

2.2 『国定1期』との比較

中田・近藤（2000）、中田（2006）では『国定1期』の自立語の語彙一覧を示している。これにより得られた品詞別比率を示したのが表3である。

『国民読本』は全12巻、『国定1期』は全8巻であるが、語数、品詞別の結果は驚くほど類似している。語数が述べ語で『国民読本』16569語、『国定1期』16181語という結果は、『国民読本』が日本語を母語としない台湾人向けの、いわば第二言語習得用の教科書であったことが文章量を抑えさせたのであり、その目安は偶然の結果かもしれないが、6学年で十二分の八、即ち4年制相当が用意されていたことがわかる。

さて、品詞別の結果は前述の樺島（1979）「小説地」よりさらに類似し、ほぼ重なる結果になった。今、述べ語を示せば、名詞（名詞＋代名詞）50.5対49.3（先が『国民読本』、以下同じ）、動詞31.9対31.3、形容詞4.0対3.9、形状詞3.2対2.8、連体詞2.9対3.6、副詞5.2対5.7、接続詞2.0対2.7、感動詞0.2対0.7である。名詞を除きすべて小数点の誤差で

【表3 国定1期 品詞構成】

	異なり語	述べ語
名詞	1855 (59.4%)	7479 (46.2%)
代名詞	37 (1.2%)	497 (3.1%)
動詞	797 (25.5%)	5068 (31.3%)
形容詞	94 (3.0%)	623 (3.9%)
形状詞	93 (3.0%)	457 (2.8%)
連体詞	13 (0.4%)	588 (3.6%)
副詞	143 (4.6%)	920 (5.7%)
接続詞	33 (1.1%)	430 (2.7%)
感動詞	60 (1.9%)	119 (0.7%)
計	3125	16181

ある。異なり語についても両者はほぼ一致した結果となっている。

この類似の背景は、『尋常小学読本』以降の検定期教科書、国定期教科書をすべて調査してからでない、また『尋常小学読本』以前の自由編纂期教科書を調査してからでない、と明確なことはいえないが、「教材の多方面であり、総合的であること、文章も亦比較的多種多様であ」れば、即ち『尋常小学読本』以降の総合読本の体裁を採る教科書であれば、教材の相違を越えてその品詞別の構成は非常に類似したものになる可能性を示していると思われる。これより、『国民読本』は品詞別構成の観点からいっても、『尋常小学読本』以降の流れを汲み、『国定1期』に通じた側面を持つ教科書と位置づけられよう。

ところで、藤原(1992)は、国定第1期イエスシ読本から第4期サクラ読本(1933年使用)までを対象とし国定読本の計量的な語彙調査を行っている。ここで注目すべきは、雑誌『中央公論』と国定読本との語彙比較を行った結果、「この両者の間にあまり差は見られない。というよりも、この二つの資料の品詞構成は、驚くほど似ている。」と述べている点である。表4は藤原(1992)によるものである。国定読本は4期全体の述べ語数であり、中央公論は4年分(1906・1916・1926・1936年)をまとめたものである。品詞区分の「体・用・相・その他」は『分類語彙表』(国立国語研究所編)の区分によるもので、国定読本の集計結果もそのための操作が加えられている。

表4をみると藤原の指摘通り非常に似ていることがわかる。藤原は異なり語でみても似た品詞構成になっていると指摘した上で、この類似について二つの可能性を指摘している。一つは、「読本も雑誌も『様々な話題を取り混ぜて提供する読物』という共通の資料的性格があり、「その性格が直接この結果に投影した」、あるいは資料中の「種々

【表4 国定読本と中央公論の品詞構成】

	国定読本	中央公論
体	89076 (51.5%)	20790 (52.0%)
用	52485 (30.4%)	12024 (30.1%)
相	27113 (15.7%)	5940 (14.9%)
その他	4197 (2.4%)	1246 (3.1%)
計	172871	40000

(藤原(1992)記載の表を一部変更)

の文体が混在することで、個々の文体的特徴が全体として中和された結果」とする。もう一つは「似たような品詞構成から違う文体を形成することが可能であるという解釈」である。藤原の前者の指摘は、『尋常小学読本』以降の、総合読本の体裁を採る教科書において品詞別構成が類似してくる根拠を、「教材の多方面であり、総合的であること、文章も亦比較的多种多样であ」ることに求めた本稿の指摘につながるものである。

ただし、藤原の提示の述べ語の資料は、国定読本は4期全体、中央公論は4年分をまとめたものであった。表5は『国民読本』と『国定1期』の結果を、藤原に倣い『分類語彙表』にしたがって「体・用・相・その他」で示したものだが、表4の国定読本のデータと比べるとその差が若干ながら広がることがわかる。

また、藤原(1992)は異なり語については各期別に提示しており、「体」だけを引用すれば、国定1期62.3対中央公論1906年65.6、2期67.2対1916年64.6、3期64.4対1926年65.7、4期64.2対67.1となっている。国定読本の中でも62.3から67.2の幅があり、中央公

論でも64.6から67.1の幅があることがわかる。大枠としては類似した結果と認められるが、述べ語を4期まとめた表4の結果にみる類似性に比べ、誤差が広がっていると捉えられる。4期をまとめることにより、藤原が述べる「個々の文体的特徴が全体として中和され」る現象がより強まるのではないかと考えられる。

【表5】

(述べ語)

	国民読本	国定1期
体	8381 (50.5%)	7976 (49.3%)
用	5284 (31.9%)	5068 (31.3%)
相	2529 (15.3%)	2588 (16.0%)
その他	375 (2.2%)	549 (3.3%)
計	16569	16181

以上より、『国民読本』は、品詞構成の観点からみれば、大きくは小説地に近い文章形態であり、総合雑誌である『中央公論』の文章により近く、さらには国定期教科書とも類似し、とりわけ『国定1期』とはほぼ重なるほどの類似性をみせることがわかった。これより、『国民読本』は従来指摘してきた教材編成の在り方などに加え、品詞別構成の観点からみても『尋常小学読本』以降の流れを汲み、『国定1期』に通じた側面を持つ教科書であることが指摘できた。

3. 高頻度語彙からみた『台湾教科用書国民読本』の語彙

3.1 高頻度語彙のうち『国定1期』と重なる語

藤原(1992)は、国定読本の語彙の内容的な特徴についても『中央公論』との比較からの確な指摘を行っている。国定読本4期全体の頻度順語彙表と中央公論のそれとの対照を踏まえ、上位160語について考察している。上位30語ぐらいは両者共通するがそれ以下では順位がかなり違った結果となり、「ごく基本的な要素は共通するものの、その他の要素は相当異なることが予測される」としている。そして、中央公論では160位までに入っていないが国定読本で160位以内に入る語を品詞別に上げ、「国定読本の語彙は、具象的な意味の語彙が多いことが特色であり、児童の生活・世界に密着したもの・児童の興味を引きやすいものを、表現素材としている」とまとめている。

では『国民読本』の高頻度語彙からみた特徴はどうなっているか。表6は『国民読本』の使用語彙を頻度順に上位180語をあげ、参考にそれら語彙に対応する『国定1期』での順位を付した資料である。

【表6『国民読本』の語彙（頻度順）】

(a)国民読本順位（上位180語まで） (b)見出し語 (c)漢字表記 (d)頻度
 (e)国定1期順位（190位・頻度15までのものみ表記。それ以下は（ ）内に頻度を表記）

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
1	ある	有	居	749	2	61	たべもの	食物	32	(1)	ところが		20	(13)
2	いる	居	居	360	3	62	うえ	上	31	70	のむ	飲	20	(6)
3	する	為	為	328	5		がっこう	学校	31	47	ひとつ		20	95
4	なる	成	成	323	6		ここ	此処	31	76	かかる	掛	19	(6)
5	その	其	其	309	8	65	こさい	小	30	(12)	きもの	着物	19	150
6	ひとつ	人	人	232	10	67	はいる	入	30	150	すすむ	進	19	139
7	いう	人言	人言	211	1	68	やま	山	29	54	たいせつ	大切	19	(2)
8	この	此	此	188	7		うみ	海	28	51	べんきょう	勉強	19	(2)*3
9	こと	事	事	146	4		からだ	体	28	128	みなみ	南	19	(7)
10	また	又	又	141	18		じぶん	自分	28	(8)	よるこぶ	南喜	19	(3)
11	もの	物	物	127	9		はは	母	28	61	いっしょ	一緒	18	(11)
	よう	様	様	127	11		わたくし	私	28	35	しごと	仕事	18	(8)
13	とき	時	時	123	21	73	かわ	川	27	150	たね	種	18	(2)
14	それ	其中	其中	118	26		たいそう	大層	27	16	てんのう	天皇	18	ナシ*4
15	なか	中	中	117	33		ひとり	一人	27	(11)	ないち	内地	18	ナシ
16	ところ	所	所	103	19		ほか	外	27	59	はやい	早	18	102
17	くる			102	12	77	いちばん	一番	26	128	137	137	17	109
18	でき	出	出	100	23		いれる	入	26	(11)	かう	大買	17	178
19	いく	行	行	98	13		いろいろ	色々	26	123	かける	掛	17	84
20	これ	此	此	96	14		たいがい	大概	26	ナシ	けしき	景色	17	(7)
21	ゆえ	故	故	86	ナシ		ひ	日	26	29	こしらえる	拵	17	44
22	いえ	家	家	81	35	82	き	木	25	22	こめ	米	17	123
	みな	皆	皆	81	(9)*1		しゅじゅ	種々	25	(3)	じょうき	蒸気	17	(8)
24	こども	子供	子供	77	61		それから		25	(14)	せいと	生徒	17	(11)
25	くに	国	国	74	15		た	田	25	(14)	のる	乗	17	(11)
26	よく	良	良	72	45		み	実	25	95	ぶた	豚	17	(1)
27	おおい	多	多	69	76		もつ	持	25	95	147	147	16	(3)
	みず	水	水	69	47	88	あげる	上	24	123	おとこ	弟男	16	(9)
29	で	出	出	67	28		きれ	奇麗	24	88	おなじ	同	16	(8)
30	いま	今	今	64	30		たつ	立	24	150	き	気	16	178
31	わが	我	我	62	26		つねに	立	24	(5)	これら	此	16	(5)
32	よい	良	良	61	32		はじめ	初	24	95	ころ	頃	16	150
33	ない	無	無	60	31		まえ	前	24	61	さむい	寒	16	123
34	たくさん	沢山	沢山	58	38		むかう	向	24	(6)	しょうばい	商売	16	ナシ
35	みる	見	見	56	24	95	けれども		23	(9)	すぐ	直	16	139
36	たいわん	台湾	台湾	54	12		はたらく	働	23	(9)	すくない	少	16	(8)
37	こ	子	子	53	139		ふたり	二人	23	76	せんそう	戦争	16	(10)
38	ある	或	或	52	40		まだ	未	23	102	たいなん	台南	16	ナシ
39	しまう	仕	仕	50	51	99	くださる	下	22	109	たてる	立	16	(9)
	みえる	見	見	50	47		そう	然	22	178	のぼる	上	16	165
41	ほう	方	方	49	40		ちや	茶	22	(12)	べんり	便利	16	(6)
42	とる	取	取	48	56		やる	遣	22	115	みなと	港	16	(4)
43	そうして			47	(1)*2		わる	悪	22	(12)	りっぱ	立派	16	(10)
44	また	又	又	46	40	104	しま	島	21	(7)	164	164	16	(4)
45	のち	後	後	44	(10)		すこ	少	21	(10)	ある	雨	15	102
46	あいだ	間	間	43	95		だんだん	段々	21	59	あめく	歩	15	(8)
47	もの	者	者	42	45		つける	付	21	128	うち	内	15	33
48	かえる	帰	帰	40	76		にし	西	21	(14)	おちる	落	15	(7)
49	おく	置	置	39	128		ひがし	東	21	(13)	がくもん	学問	15	(4)
	それゆえ			39	ナシ		まいにち	毎日	21	(7)	きく	聞	15	88
	つくる	作	作	39	(6)	111	うま	馬	20	102	さす	差	15	150
52	おもう	思	思	38	39		うる	売	20	(12)	しる	知	15	88
	ふね	船	船	38	88		がいこく	外国	20	74	すいぎゅう	水牛	15	ナシ
54	はな	花	花	36	40		きた	北	20	(4)	せんせい	先生	15	165
55	おおい	大	大	35	(8)		けもの	獣	20	178	だす	出	15	84
	まことに	誠	誠	35	(8)		さく	咲	20	54	たはた	田畑	15	ナシ
	むかし	昔	昔	35	139		じんみん	人民	20	ナシ	なだかい	名高	15	102
58	たべ	食	食	34	128		すると		20	128	は	業	15	50
	ため	為	為	34	(11)		たかい	高	20	115	びょうき	病氣	15	(11)
60	しなもの	品物	品物	33	(8)		つかう	使	20	70	ほん	本	15	(6)

*1 国定「みんな」は67位、頻度31。

*2 国定「そして」は16位、頻度100。

*3 「勉強」台湾1例、国定ナシ。

*4 「天皇」台湾12例、国定25例、「天皇陛下」台湾9例、国定12例。

まず、藤原の資料を基に、『国民読本』でも『中央公論』との比較から同様のことが指摘できるかみていく。中央公論の上位160位以内になく、国定読本で上位にある語が『国民読本』ではどのような結果になるか、『国民読本』での順位を示す。なお、上位180語に入らないものは出現頻度を()に入れて示す。

名詞 日 77 水 27 木 82 船 52 国 25 山 67 海 68 花 54 声(3) 敵(8) 馬
111 むかし 55 道(12) おとうさん(0) 父(11) のち 45 二人 95 学校
62 子供 24 風(11) 子 37 空(14) おかあさん(0) 川 73 おじいさん(5)
色(10) 葉 164 汽車(10) 母 68 村(2) 後(あと)(8) 音(2) 下(13) 雪(5)
にいさん(0) 朝(3) 雨 164 月(1) 鳥(14) ちから(14) 名(3)

代名詞 だれ(7)

動詞 ござる(ごぞいます)(11) とる 42 だす・いだす 164 進む 124 付ける 104
咲く 111 飛ぶ(7) 下さる 95 立てる 147 のぼる 147 のる 137 通る
(12) 向う 88 入れる 77 掛かる 124 喜ぶ 124 続く(13) 申す(0) 鳴く
(7)

形容詞 はやい 131 高い 111 長い(11) 美しい(10) 小さい 65 おもしろい(4)

副詞 よく 26 たくさん 34 すぐ 147 たいそう 73 段々 104 やがて(3)

接続詞 そうして 43 すると 111

『国民読本』の上位180語以内(頻度15以上)に入らない語は、全体75語のうち、名詞22語、代名詞1語、動詞3語、形容詞3語、副詞1語、接続詞0の、全30語ある。藤原の結果と必ずしも重ならないようにみえるが、その内頻度10以上は13語あり、180位以内の45語と合わせれば58語になり、ほぼ藤原の結果と重なっているといえよう。頻度5未満は「声・おとうさん・おかあさん・音・にいさん・朝・月・名・申す・おもしろい・やがて」の11語であるが、藤原の国定読本のデータは4期全体の頻度順になっているので、国定読本共通語の側面が色濃く出る。その点、『国民読本』単独であると個別性が現れ、頻度5未満の語も11語現れたものと思われる。実際、『国定1期』単独の結果をみるとこの頻度5未満の内、「声・名」は317位(頻度9)、「音・月」は411位(頻度7)、「申す・やがて」は675位(頻度4)となっている。これらは国定2期以降に多用されたものと思われる。「おとうさん・おかあさん・にいさん」の親族呼称は『国民読本』では別な呼称が採られているために0となっている。

以上、『国民読本』の個別性を認めるとすれば、『国民読本』の高頻度語彙の分布はほぼ『国定1期』と重なるといえよう。藤原は、国定読本は「具象的な意味の語彙が多く、「児童の生活・世界に密着したもの・児童の興味を引きやすいもの」を表現素材としていると指摘していた。この点は『国民読本』にも共通していえよう。図書審査委員の一人として『国民読本』巻1・2を評価した前田孟雄の次の指摘をみれば明らかである(注11)。

賛成スル所以ハ(中略)客観的材料ヨリ入りタルコト子供ノ思想ヲ発表シ得ル様ニ

仕組ミタルコト各課ノ事項ハ易キヨリ漸々難キニ入りタルコト日常生徒ノ思想ト一致シタルコト

「客観的材料」は藤原の「具象的な意味の語彙」につながり、「子供ノ思想ヲ発表シ得ル」あるいは「日常生徒ノ思想ト一致」は藤原の「児童の生活・世界」につながる視点だと考える。

3.2 高頻度語彙のうち『国定1期』と重ならない語

一方、『国民読本』で上位にありながら『国定1期』で出現が少ないものとして表6からは以下の語が挙げられる。

国定1期ナシ； 21 ゆえ 49 それゆえ 77 たいがい 111 人民 131 天皇様
131 内地 147 商売 147 台南 164 水牛 164 田畑

国定1期5以下；43 そうして 61 食べ物 82 種々 88 常に 111 北 124 大切
124 勉強する 131 種 137 豚 147 弟 147 これら 147 港
164 兄 164 学問

これらのうち、国定読本全体でみると一定の使用を見せるのは次の語である。全5期合わせて頻度50を越える語に、「そうして (335) ・常に (72) ・北 (106) ・大切 (64) ・弟 (101) ・港 (64) ・兄 (83)」があり、頻度30を越える語に「内地 (30) ・種々 (35) ・種 (40) ・これら (48) ・学問 (31)」がある(注12)。これらの語は国定1期ではたまたま用いられなかったのであり、国定読本全体では比較的用いられる語と考えられ、『国民読本』で上位に分布する結果とは矛盾はしないといえる。

残りを品詞別に示せば次の通りである。名詞「ゆえ (0) ・人民 (3) ・天皇様 (0) ・商売 (7) ・台南 (1) ・水牛 (3) ・田畑 (8) ・食べ物 (9) ・豚 (15)」、動詞「勉強する (25)」、副詞「たいがい (6)」、接続詞「それゆえ (7)」となる。このうち、「ゆえ・それゆえ」は国定全5期では出現せず、『国民読本』で採られた古めかしい表現の可能性が高い。「人民」は国定全5期で3例しかなく、「国民」という語が国定1期で11例、全5期では85例の使用となっている。『国民読本』の「人民」は現代語の「国民」に近い意味で用いられており、実際『国民読本』では「国民」は11例にとどまる。また、「天皇様」の語は、天皇を「様」付きで呼ぶ習慣は日本になく、国定読本にも一切みられない。「人民」や「天皇様」のような内地での一般的な使い方と異なる使用の背景は、編纂者の出身の問題ほか、今後検討すべき課題である。

なお、現代語から見て特徴的な語も存在し、中田 (2003a) ではそのような例をいくつか指摘している。「あぎ (顎) ・え (餌) ・いりよう (入用) ・おぼえのつよい (物覚えが良い) ・かいこく (海国)」などである。このような語の使用についても国内資料との比較を通じ検討していかなければいけない。今後の課題である。

さて、使用語彙は当然ながら教材の反映であり、どのような教材が採られているかに、使用語彙の背景は求められる。「台南」の地名、「水牛・豚」の動物名は台湾を舞台にし

た教材の反映であり、台湾ゆかりの語といえる。農業関係の「田畑」はそれに準ずるか。

残った語彙のうち、「商売」は『国民読本』には147位16例みられるが、国定1期にはなく、国定全体でも2期に3例、3期に4例あるのみである。「高い」をみても国定には2期に1例あるのみである（『国民読本』は1例）。一般的な語彙と思われるが、何故このような差が現れたのか。明治31年発布「台湾公学校規則」「第1章主旨」第1条には次のようにある。

公学校ハ本島人ノ子弟ニ徳教ヲ施シ実学ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ
国語ニ精通セシムルヲ以テ本旨トス

即ち、台湾公学校の本旨として「実学ヲ授ケ」ることが重要課題であったことがわかり、国語教材もその要請があったと考えられるのである。実際の教材編成をみても、中田（2004）では、台湾の第3期までの教材編成上の特徴を指摘した上で、『国民読本』だけの特徴として次を指摘している。

（1）政治家・軍人がたった1名、鄭成功のみである。

（2）学者、実業家（特に商人）が多く採られている。

このような教材の背景があつて、「商売」が多く使用されているものと思われる。また、国定全体では25例みられはするが、『国民読本』だけで19例に上る「勉強する」も、同様の背景が考えられよう。

なお、「たいがい（大概）」は国定全5期で6例見られるだけだが、現代語でも使われるこの語が国定読本でなぜ少ないのか、今のところ不明である。また「食べもの」が何故国定読本で少ないのかも不明であり、今後の課題である。

逆に『国定1期』上位164内にあり、『国民読本』で出現が少ないものとして次の語が挙げられる。これらについても、教材との関係（例えば、中田（2004）で指摘している通り『国民読本』では軍事関係の少なさがあり、「幕府・軍艦」が用いられないのだろう）、新しい語との関係（「おかあさん・ぼく」）などが考えられるが、ここでは指摘にとどめる。

台湾1期ナシ；　そして　みんな　幕府　おかあさん　銭　あかがね　そのうち
または　金（きん）　ぼく　お話　為す

台湾1期5以下；松　わたくしども　絵　軍艦　村　あの　しかし　みなさん
仲間　あれ　ああ　得る　たいてい　それでは　こう　それで

また、藤原（1992）で指摘する、雑誌（中央公論）では頻度が高いのに国定読本では低いという語彙の存在についても、『国民読本』での状況を指摘しなければならないが、紙面の関係上稿を改めて考えたい。

4. まとめ

『国民読本』の語彙の特徴を品詞構成、高頻度語彙の観点からみてきた。語彙の計量的分布からいえることは、『国定1期』との比較などを通し、明治20年文部省編纂『尋

常小学読本』以来の内地編纂教科書の形態に非常に近いことがわかった。これはこれまで、教材課名、教材内容、教科書の成立過程などから指摘してきたことであったが、語彙の面からも確認できたといえる。『国民読本』が「教材の多方面であり、総合的であること、文章も亦比較的多種多様である」という特徴を持ち、内地編纂教科書と共通した性格を持つことがその理由として考えられた。また、個々の語彙についても高頻度語彙の分布から、「児童の生活に密着した」「具象的な意味の語彙」が多いという特徴を内地編纂教科書と共通に持つことが確認できた。

一方、個々の具体的な語彙からは、台湾教育の本旨を背景に、あるいは台湾の自然地理・風土を背景に学ばれる教材であることから、内地編纂教科書には現れてこない台湾独自の側面があることも確認できた。個別性である。

本稿は『国民読本』所載語彙を量的観点から捉えることを通し、内地編纂教科書に通じる面と独自の面を併せ持つことを明らかにすることを目標としていた。この目標は押さえられたと考えられる。今後の課題は、『国民読本』所載語彙が近代語彙としてどのような位置に来るのか、『国民読本』が近代語彙資料としてどのような使われ方の可能性があるのかといった点である。個々の語彙史的な側面を踏まえながら、編纂者の問題、当時の台湾での日本語状況の問題などの幅広い課題を射程に入れていかなければならないと考えている。

注1 中田（2003b）、中田（2004）による。

注2 この二面性は、台湾統治の最後まで保たれることは中田（2007）で触れている。

注3 個々の語彙の特徴については中田（2003a）で指摘している。

注4 ゴアン式教授法とは、台湾総督府『ゴアン氏言語教授方案』（明治33年）、同『台湾公学校国語教授要旨』（明治33年）で紹介された、話方科教授と連携しながら導入される日本語教授法の一つで、幼児の言語習得にヒントを得た一連の動作を基軸にことばを学習するという方法をとるものである。

注5 台湾総督府『台湾公学校国語教授要旨』（明治33年）による。

注6 中田（2003b）では教材課名などの面から、中田（2004）では教科書の成立過程・教材内容等の面から指摘している。

注7 中田（2004）による。

注8 井上（1984）126頁～157頁による。

注9 井上（1984）156頁による。

注10 「大矢博士自伝」（『国語と国文学』第5巻第7号 昭和3年）による。

注11 酒井（1998）に紹介された公学校図書審査会資料による。

注12 数値は全5期の用例数である。データは国立国語研究所（1997）による。

引用文献

- 樺島忠夫 (1979) ; 『日本語のスタイルブック』大修館書店
- 井上毅 (1984) ; 『国定教科書編集二十五年』武蔵野書院 (井上毅著・古田東朔編)
- 国立国語研究所 (1985) ; 『国定読本用語総覧1 第一期あ～ん』三省堂
- 藤原浩史 (1992) ; 「国語読本の語彙の性格」(『日本語学』1992年2月号)
- 国立国語研究所 (1997) ; 『国定読本用語総覧CD-ROM版』三省堂
- 酒井恵美子 (1998) ; 「『台湾台湾教科用書国民読本』の編纂と公学校教科用図書審査会」(『台湾総督府文書目録第五巻』解説 ゆまに書房)
- 中田敏夫・近藤久美子 (2000) ; 「国定読本第1期名詞語彙一覧」(『愛知教育大学大学院国語研究』第8号 愛知教育大学大学院国語教育専攻)
- 中田敏夫 (2003a) ; 「『台湾教科用書国民読本』の語彙の特徴」(平成12年度～平成14年度科研費報告書『台湾総督府編纂国語読本の国語学的研究』(代表酒井恵美子)
- 中田敏夫 (2003b) ; 「台湾総督府編纂公学校用国語教科書を通してみた国民意識の形成」(中京大学社会科学研究所『台湾の近代と日本』)
- 中田敏夫 (2004) ; 「台湾総督府編纂『台湾台湾教科用書国民読本』の教材編成」(『教科書フォーラム』NO.02 中央教育研究所)
- 酒井恵美子・中田敏夫 (2004) ; 「『台湾台湾教科用書国民読本』自立語一覧」(『中京大学教養論叢』45 巻2号 中京大学教養部)
- 中田敏夫 (2006) ; 「国定読本第1期語彙一覧(名詞を除く自立語)」(『愛知教育大学大学院国語研究』第14号 愛知教育大学大学院国語教育専攻)
- 中田敏夫 (2007) ; 「植民地『国語』(日本語)教科書は何を語るか—台湾総督府編纂国語教科書からみた『内地化』の限界」(『植民地教育研究史年報第9号』皓星社)

【付記】

本稿は、日本植民地教育史研究会第14回研究発表会において行った研究発表「『台湾教科用書国民読本』と第1期国定読本との語彙比較」に基づいている。発表の場では有益な示唆を多くいただいた。記して感謝申し上げます。

(なかだ としお)